法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

敵中突破五万四〇〇〇キロ : 遣独潜水艦伊8のブレスト訪問記

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社会労働研究
(巻 / Volume)
42
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
51
(発行年 / Year)
1995-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007292

敵中突破五万四〇〇〇キロ

——遣独潜水艦伊8のブレスト訪問記——

宮永　孝

一　はじめに
二　遣独艦伊8の派遣事情
三　アフリカ洋上で独潜U一六一号と邂逅
四　ブレスト入港
五　ブレスト滞在とパリ見物
六　内野艦長らのベルリン訪問
七　ブレスト出港——一路故国へ
八　むすび

一　はじめに

パリの西五九〇キロの所にブレスト（Brest）という軍港都市がある。

正確にいえば、この市はフランス北西部、フィニステール県西部に位置している。ブルターニュ半島の突端近くの狭隘な水道（船路）によって、外海の大西洋から守られたブレスト湾の北に面している。今日、ブレスト市の人口は

約一六万である。ブレストはローマ時代からの港であり、一四世紀には一時イギリスによって占領されたこともあったが、一六世紀にフランス王領となった。軍港として重きをなしたのは一七世紀になってからであり、ジャン・バプティスト・コルベール（一六一九～八三、フランス絶対王政期の政治家）によって、港はいっそう整備され、さらにアルマン・ジャン・デュ・プレシス・リシュリュ（一五八五～一六四二、フランスの政治家）によって海軍基地となり、セバスティアン・ル・プレストル・ド・ヴォーバン（一六三三～一七〇七、軍事技術者・築城家）が要塞化した。かくしてブレストにパンフェルト三角江の特徴を生かして、海軍基地・工廠・兵学校などが置かれた。南東は商港として枢要であり、イギリスとの貿易も盛んなようだ。今日のブレストは、電気機械（主に通信機類）・造船・化学工業・既製服製造の市として知られている。

ブレスト市街は、パンフェルト河岸の岩石の多い丘陵の上に在る。かっては、城壁が市をすっぽりと取り囲んでいたが、今はそれは無い。一七世紀の末、市のほぼ中心にサン・ルイ教会が建てられ、さらに市役所・リセ・劇場・図書館・裁判所・病院・証券取引所・寺院・銀行・郵便局・警察署・駅舎・海軍病院・鎮守府・兵舎・植物園などが逐次建設された。ブレスト駅（旧称「西の駅（ガール・ルウエスト）」）の外に出、〝クール・ダジョ〟（Cours Dajot）と呼ばれる散歩道から港湾地区を見下ろすと、倉庫群と商船と港が見られる。さらに西の端まで行くと、城（シャトー）（フランス海軍の施設、兵学校の所在地）がみえる。ブレストの錨地（びょうち）はじつに広大であり、紺青色を帯びている。投錨地の視界は広く、対岸の陸地（ロクミクリック）が小さく見える。晴れた日であれば、その眺望はとてもすばらしい。ナントからロリアンに向かう車中で会った女子大生たちは、「ブレストはつまらぬ所、何も見るべきものは無い」といったが、筆者のようにある目的をもった者には、訪問地がたとえ風景美に富んでいなくても、特別の感興をもよおすのである。

今日、ブレストには古き軍港都市の面影はなく、まったく新しい市の様相を呈している。なぜならこの地は、第二

次世界大戦中、連合国側のたび重なる空襲により大きな受難を受けたからである。

一九四〇（昭年一五）年六月一〇日から一九四四年（昭年一九）年九月一八日までの約四年数ヵ月、ブレストはドイツ軍によって占領され、ドイツ海軍の潜水艦（Uボート）の基地となった。そのため市街と港湾施設は、連合軍のたび重なる猛爆撃によって、壊滅的打撃をうけた。戦中、戦後のブレストを撮った写真を見ると、市街とその周辺はがれきの山であったことが分かる。空襲がいかにすざましいものであったかを如実に物語っている。

今日、何の変哲もないブレストを訪れる邦人はそう多くはあるまい。ブレストへは、パリのモンパルナス駅から高速列車（T・G・V）を利用すれば約五時間で行けるのだが。

昭和一八（一九四三）年八月三一日のことである。ドイツ占領下のブレストは、いつものように朝を迎えた。

早朝、この港は薄いもやがかかったようになる。港口の右岸はクロゾン半島、左岸にはブレストの丘陵が広がっている。両岸とも薄い霧がかかっており、青灰色にみえる。暴風雨でもないかぎり、港内の海はいつもおだやかである。

平時であれば、長閑（のど）かなフランスの絵になるような風景が展開しているはずだが、今は何とも異様な、戦時色の濃い光景が眼に入る。空には防塞気球がいくつもあがり、岬には擬色されたトーチカ・高射砲・機関砲などがみられ、木や岩の間から空をにらんでいる。[1] ペナンの海軍基地を出港してからというもの、日本海軍の伊号第八潜（以下伊8と略す、二五〇〇トン、艦長内野信二中佐、時に四三歳）[2] は、ひたすらブレストを目ざして航進を続けた。すでに六五日間、海上走行と潜水をくり返し、最大の危険海域であるオルテガ岬沖、ビスケー湾を無事通過した。イギリスの哨戒域を突破できた、と確信した内野艦長は、二日前の八月二九日午後一〇時、ついに暗夜の海上に浮上を命じた。潜航以来約一八時間半ぶりの浮上であった。艦内の士官や水兵の間から大きな歓声があがった。

伊8は、八月三一日の早朝、ブレスト港口に達したころ、多数の水雷艇、哨海艇、機雷原突破船に前後を護られて

いた。やがて次第に空が明るくなるにつれて、いつの間にかその数はふえ、数十隻を数えるまでになった。どの艇も赤地に丸く卍を浮かせたドイツ海軍の軍艦旗を翻している。ブレストはブルターニュ半島の尖端にあり、ドーバー海峡をへだててイギリスと対峙していたから、港口には絶えずイギリス空軍の飛行機がやって来て機雷を投下してゆく。だから細心の注意を払って進まねばならぬ。うっかり艦がそれに触れようものなら一大事、軽くて大きな穴を開けるか、最悪の場合は、破砕され海底に沈む運命にある。幸い伊8は、ドイツ海軍の計らいで、前方に三隻の突破船によって誘導され、さらに後方にも三隻付き添われて[3]、無事湾内（錨地）に入った。

艦は、錨地の中をつき進んでゆくと、後背地に小高い丘をもつ陸地（ルクーヴランス地区）が、はっきり見えるようになった。そのうち一隻の水雷艇が近づいて来、本艦の左舷に横付けされた。それには大勢のドイツ将校や水兵が乗っている。皆、鼻は高く、青い眼をしており、髪は赤くちぢれている。これらのドイツ人は、当時の日本人にとってとても興味を惹くものであった。将校はメガホンで何やら叫んでいる。カメラを手にし、さかんに写真を撮っている下士官の姿もある。日本の海軍士官の顔も二人ほどみえる。一人は潜水艦戦の研究のために渡独した江見哲四郎海軍中佐、もう一人は駐独日本大使館付武官藤村義朗海軍少佐（のちにスイスで終戦工作に従事）である。それから水先案内役のドイツ潜水艦長の姿もあって、程なく日独の士官らは本艦に移乗してきた。

伊8は、湾奥に位置し、ルクーヴランス地区に在る独軍のブンカーBunker（掩蔽壕。潜水艦繋留場所・修理施設・魚雷調整場などを設備している）に向かった。このブンカーは、いわば潜水艦の格納庫といったもので、船渠工場をもつ、正方形または長方形のコンクリートの建物である。その屋根の厚さは、何んと六、七メートルもある。ロリアンのブンカーもそうだが、ドイツ軍が数年をかけて堅牢に造ったものである。当時、一トン爆弾にも堪えうる強度をもっていた。

艦は曳船によってブンカーに近づくにつれて、その屋根の上にたくさんの見物人の姿が見えた。陸上でも黒山の群集が、極東の地からはるばるやって来た黒い大きな潜水艦と日本人を興味深げに見ている。伊号第八潜の甲板には、第一種軍装に着がえた士官と水兵が整列していた。やがて艦首をブンカーのAの1（正面に向かって左端の壕）に入れようとしたとき、ドイツ海軍儀仗隊が日独の国歌を奏して歓迎した。とくに国歌「君が代」の演奏が終るや、内野艦長の音頭で「万歳」を三唱すると、それに和して陸上からも「hurra（フラー）！」（万歳）の三唱が起った。困苦欠乏と危険に満ちた、命がけの大航海を経て、目的地に無事到着したことは大きな喜びであり、かつ感慨無量であった。そのときの気持を、内野艦長は「国歌君が代を聞いた乗員は、一人残らず六〇余日の苦斗も忘れ、ただただ感激したことは生涯忘れることはあるまい」[4]と回想している。

伊8は、なぜ戦況悪化のこの時期、あえて長期にわたる苦しい航海と大きな危険を冒してまでヨーロッパ大陸にやって来たのであろうか。当然その行動には特別仕務が付随していた。昭年一八（一八四三）年二月、スターリングラード全域のドイツ軍が降伏すると、期せずして同時期にガザルカナル島の日本軍も撤退を始め、日独両国の戦争遂行の前途にさらに暗雲が立ちこめるようになった。大本営は、日独伊三国の同盟体制を堅持してゆく上で、シベリア経由でドイツ、イタリアに連絡使を派遣することになったが、このころ日本と枢軸側との連絡は、無線通信と国際電話を除くと途絶しているに等しかった。またその通信内容にいたっては、連合国側に筒抜けであった。このような状況下にあって、とくにドイツとの連絡に当ったのは、日本海軍の潜水艦であった。

枢軸側は日本との連絡・通交手段として航空機を用いることを試みたが、ソ連上空を通過せねばならず、この計画は、日ソ関係悪化を憂いた東条首相によって否決された。結局、日本側は、潜水艦によって人員（連絡使、技術者）・機密兵器・物質の交流を図り、ドイツ側が渇望している酸素魚雷・潜水艦懸吊（けんちょう）装置[5]・キニーネ（薬用）・生ゴム・

タングステン・錫・モリブデンなどを譲ることにし、相手からは最新のレーダー装置・ジェットエンジンとその設計図・高速潜水艦（U五一一、のちの「呂五〇〇潜」）などが譲られた。

第二次大戦下の昭和一七（一九四二）年から一九（一九四四）年の二ヵ年間に、計五隻（第一便伊号第三〇潜［遠藤忍中佐］、第二便伊号第八潜［内野信二中佐］、第三便伊号第三四潜［入江達中佐］、第四便伊号第二九潜［木梨鷹中佐］、第五便伊号第五二潜［宇野亀雄中佐］）の日本海軍の潜水艦がドイツ占領下の北仏ブレストやロリアンに赴いているが、うち三隻（伊号第三四潜、伊号第二九潜、伊号第五二潜）は渡欧と帰国時に失なわれ、残り二隻（伊号第三〇潜、伊号第八潜）だけが帰ってきた。結局、戦況逼迫下の折、無事に任務を果たして日本に帰還した艦は、第二回目の遣独潜水艦（伊号第八潜、＝艦長内野信二大佐）一隻だけであった。第一便の伊号第三〇潜は、昭和一七年四月二二日ペナンを出港し、ロリアンからの帰途、シンガポール港でイギリス海軍が敷設した機雷にふれ沈没。第三便の伊号第三四潜は、昭和一八年一一月一三日シンガポールからペナンに向かう途中、英潜により撃沈された。第四便の伊号第二九潜は、昭和一九年七月二六日フィリピン西方洋上で米潜によって撃沈され、第五便の伊号第五二潜**は、昭和一九年三月末に呉を出港し、ヨーロッパに向かい、同年六月二三日アゾレス諸島北方約六〇〇浬（カイリ）の洋上で独潜と会合したことをベルリンの武官室に連絡して来たのをさいごに消息を絶った。このように遣独潜水艦の大半は壮途につく途中で挫折し、尊い人命が失なわれた。が、この稿は決死の往復全行程を完了し、無事呉に帰港した唯一の潜水艦伊8のヨーロッパ行の経験の意義とその成果について描こうとするものである。

二　遣独艦伊8の派遣事情

昭和一八年三月下旬のことである。海軍中佐内野信二は潜水艦部の後藤汎大佐から軍の極秘事項と前置きされ、潜水艦一隻をドイツに派遣する計画があること、伊8がその候補の中に入っていることを告げられ、合わせて同艦の航続力、約六〇名の増加定員を収容するために艦内の一部を改造することが可能かどうか、至急調査して報告するよう命じられた。[6] 内野中佐は早速調べたところ、同艦がペナンからドイツ占領下のフランスの軍港まで一四〇〇〇マイルは優に行けること、また艦内の改造も可能の旨報告すると、伊8を遣独艦とすることに決った。

この時期、ドイツとイタリア両軍は、スエズおよび中近東方面の作戦で目覚ましい戦果をあげることなく、形勢はきわめて不利であり、独伊の首脳は苦悩していた。昭和一八年の春になると、ヒトラー総統は、インド洋方面において日独双方の潜水艦による共同作戦（敵海上交通破壊戦）の実施を申し入れてきた。しかし、日本海軍は、太平洋方面の作戦を行なうのが手一杯で、とてもドイツ側の要望にそえるだけの潜水艦を保有してはいなかった。当時、日本海軍が外洋作戦に使用できる潜水艦は四〇隻ほどで、過半数以上は艦隊作戦に当てられていた。[7] そこでヒトラー総統、リッペントロップ外相、大島駐独大使との三者会談において、ドイツ側は建造日数が短く、量産に適する最新鋭の中型潜水艦（一〇〇〇トン級）二隻を日本に無償供与するから、それをモデルに多数建造し、インド洋に配備し、敵の海上輸送路を破壊してほしい旨要請した。供与する二隻のうち一隻は、ドイツ海軍の乗員で回航するが、他の一隻は日本海軍の手で回航して欲しい、ともいわれた。伊8の主要任務は、まさにこの回航員（乗田貞敏少佐以下五〇余名）をドイツまで輸送することであった。

昭年一七年三月ごろの日独間の作戦協定では、日本海軍が担当するのは、東経七〇度を通ずる以東のインド洋、ド

イツ海軍担当の作戦海面は、それ以西のインド洋と大西洋であった。ドイツ潜水艦の譲渡問題についてのあらましは先に述べたとおりであるが、その真相はどうであったのか。それに関して、当時軍令部員大本営海軍参謀として潜水艦作戦に従事した井浦祥二郎大佐（一九〇二～六五）は、巣鴨拘置所（スガモ・プリズン）に入っていたとき、元駐独大使大島浩から直接次のような話を聞いたという。

「ある日、ベルヒテス・ガルテンの大本営で私がヒトラーに会ったとき、日本海軍に潜水艦二隻をやりたいと彼の方から話を持ち出したので、そのことを私は海軍武官に伝えた。ところが、その後、ドイツ海軍の兵器局長がその代価を希望しているといって、交渉がなかなかはかどらないということだったので、リッペントロップに会って話してみたところ、ヒトラーから〝それはとんでもないことだ。無論、無償でおあげするのだ〟とあって、兵器局長はヒトラーにお目玉を頂戴したという話であった。潜水艦譲渡問題はこうして即刻実現することになったのだ」[8]と。

ともあれ、伊8の艦内の一部を改造せねばならなかったのは、そこに回航員を収容するためであった。そのため予備魚雷をすべて陸揚げし、下部発射管室を大改造し、そこを居住区とした。ガザルカナル作戦後、同艦は呉海軍工廠で修理を受けていたとき、第二便のドイツ派遣艦のことが秘かにうわさされ、それがひょっとすると伊8かも知れないとの風説が立っていたが、それが的中したのである。

また伊8が対潜警戒のきびしいヨーロッパ大陸へ向かうには、電波探知機は絶対不可欠であったので、出港に際して呉工廠内では、苦心の末〝扇風機の翼〟の形をした三式超短波受信機（E27型逆探）を艦橋上の架台に取りつけ、その操作訓練をさせ、さらに燃料補給の方法を研究し、また普段でさえ狭い艦の空間のすべてに主に罐詰等の食料を大量に積み入れた。

かくして伊8は、昭和一八年六月一日の夕刻、Uボートの回航員乗田少佐以下五〇余名とドイツへ贈る機密兵器（酸

素魚雷・潜水艦自動懸吊装置・最新式水上偵察機・潜水艦無気泡発射管）と設計図などを積み呉を出港、佐伯湾に仮泊し、豊後水道を南下し、ひとまずペナンへと向かった。便乗者は次の六名である。

西原市郎中佐（スイス駐在武官として赴任）
小林一郎軍医少佐（ドイツへ留学に赴く）
山中静三（軍令部嘱託、スウェーデン駐在海軍武官室付の文官）
海軍文官二名（氏名不詳、イタリア・スペイン・ポルトガルに赴任）

ペナンに入港したのは六月二四日、途中試験潜航や訓練潜航[9]を繰り返すうちにメインタンクの一部損傷のためシンガポールに寄港せざる得なく、同工作部で修理を行なったためペナン到着がおくれた。シンガポール入渠中、ドイツ側が最も欠乏している物質――生ゴム・錫・タングステン・モリブデン・キニーネなどを積込んだ外、日本側がヨーロッパで物質を購入するために必要な金塊なども搬入した。ペナンでは昼夜兼行で諸物質を積込むのだが、ここで燃料や食料（生鮮食品ではなく、主に罐詰）のさいごの補給を行ない、六月二七日の夕方、伊8は在港の将士の見送りを受けながらペナン桟橋を離れ、航程一万四〇〇〇マイルの航海へと旅立った。内野艦長が総員集合を命じ、ドイツ行を初めて乗組員に伝えたのはこのときであり、乗員一同は、「やっぱりそうか」と思い、ヨーロッパへ赴くことを喜び、胸がおどった。

伊8の艦内に眼を向けると、乗組員はそれまでの一倍半、一六〇名に及んでいたから、その混雑は言語に絶し、居住空間は一杯となり、若い兵などは寝起きする場もなく[10]、食糧の包みの上でごろ寝せねばならなかった。狭い艦内で

は長時間潜っていると、それだけ早く空気はよごれたし、飲料水は貴重品であり、一日一回、洗面器一杯の水が支給され、それで顔・口（歯）・身体の一部などを清めた。[11] もちろん、これだけでは手足を洗うには不十分であったし、当然のことながら入浴も洗濯もできなかった。

なお、伊8の乗組員（準士官以上）は次の面々である。

艦長……内野信二（のち第一一潜水戦隊参謀、潜水学校教官兼呉潜水戦隊参謀、健在）
先任将校[12]……上捨石康雄（のちに伊三七一潜艦長として戦死）
機関長……田渕亨（佐世保工廠造機部員として沖縄出張中に戦死）
機関長付……築場源栄（戦後、病死）
航海長……吉田太郎（伊一二潜先任将校として戦死）
砲術長……大竹寿一（のち伊四七潜航海長として戦死）
通信長……桑島斎三（戦後、医師となる）
軍医長……小谷順弥（戦後、医師となる）
電気長……小夫家美得
機械長……藤井音吉
掌水雷長……泉豊亮（戦後、病死）
潜航長……伊藤豊二

ペナンを出港して四日目の七月一日、伊8はインド洋（セイロンの南）において伊号第一〇潜（以下伊10と略す）より三時間五〇分かかって一一五トンの油の補給を受けた。さらに五日後の七月六日、八〇トン[13]の送油を受け、同艦

といったん別れると、南西に針路をとりアフリカ南方へ向かった。速力は一二ノットから一六ノットであった。[14] 艦はインド洋に入ると、「がぶり」（荒波）がひどくなり、回航員や乗組員の中から、船酔い患者が出るようになった。かれらはまったく食事が摂れず、寝たきりの状態となったので、軍医長からブドウ糖の注射をうけた。荒天と暑さに不慣れの士官ですら、これから先の航海を思うと、気がふさいだ。航海中、いちばん苦労したのは波浪との闘いである。ことに機関員と艦橋上の見張り員の苦労は大変なもので、間断なくエンジンと空を見つづけた。乗組員の大半は、狭い湿度の高い艦内に閉じ込められたままで、太陽光線や外気に当たることもなく、ただじっと喘ぐしかなかった。まだしもよかったのは、交代で艦橋に立つ見張り員である。水上航上中、かれらは毎日が緊張の連続である。顔は暑い直射日光で焼かれ、すぐに真黒になる。夜は南十字星を見ながら航行するのだが、時々ふと故国日本のことが思い出される。[15] 一方、艦上に出る機会のない者は、だんだん顔の色が白くなってゆく。

外界からすっかり遮断された艦内で時刻がわかるのは、食事のとき位である。主食のおかずは、ほとんどが罐詰類であり、生鮮野菜は一切出されず、それも乾燥されたものであった。当然、ビタミン不足の懸念もあったので、それを補うためにエビオスが出され、それを食事のつど口の中に投げこんだ、という（吉村昭『深海の使者』）。

艦内の生活は不自由であったが、それでも乗組員一同は陽気であり、和やかに暮らした。士官たちもいつも和気あいあいとし、愉快に過ごした。先任将校の上捨石康雄は、ベッドに横になったとき、フランス語の勉強に[16]余念がなかった。下士官の中にも前回伊号第三〇潜でヨーロッパへ行った者もおり、暇なときドイツ語の単語や慣用句を独習した。士官室では、七月九日から文官山中静三によるドイツ語（日常会話）の速成講座が始まり、毎夕食後、一時間ずつ、四〇日間つづけられた。[17]

ペナンを出港したとき、伊8には体調不良な者は一人もいなかった。けれど艦がインド洋に入ってから、独潜の回

航員の中から高熱を発する者が出た。田島二三男上等水兵がその人である。当初、その病いはデング熱（蚊によってうつるウィルス性の熱帯伝染病）かと懸念されたが、同乗の軍医（小林、清水、小谷）らは〝熱帯性マラリア〟と診断した。水兵田島だけは上部発射管室の左舷テーブルに移され、そこで手当てを受けていたが、病状は好転せず。体を震わせ、「天井が回る！、天井が回る！」[18]とうわごとをいい、その後昏睡状態に陥り、口をきくことなく息を引き取った。かれの遺体は、棺に入れられ、さらにそこに重りとして一発の砲弾を入れ、翌七月七日、艦長以下乗組員の参列のもとに海上葬が営なまれ、海底に沈んで行った。……

伊10は燃料補給後も数日、伊8に同行したが、七月一〇日艦橋より「予メ成功ヲ祈ル」といった手旗信号を伊8に送った。それに対して伊8は「晳ッテ成功ヲ期ス」[19]と答え、同艦と別れ、単独でヨーロッパへの壮途についた。七月一一日ごろから海は時化はじめ、それは日ごとに激しくなっていった。艦首はうねりに突込み、はねあがった海水は、怒濤のごとく艦橋に襲いかかる。上甲板もつねに海水で洗われている。毎日、水上航走しているのか、潜航しているのかわからないほどであった。[20]

伊8が徐々にアフリカ南端に近づくにつれて、新たな心配が生じた。喜望峯には英軍の哨戒基地があり、さかんに索敵機を飛ばしている。その哨戒圏は五〇〇マイルにたっし、三〇〇マイルは危険区域と予想された。敵機の発見を避けるには、少なくとも三〇〇マイルの圏内を離れて航行するのが無難であった。それには南緯四〇度付近を西航せねばならないが、そのあたりには〝ローリング・フォルティス〟(Rolling Fortis「吠える海」ほどの意）と呼ばれる荒天海域がある。その範囲は、東西数一〇〇マイル、南北一〇〇マイルにわたり、一年中、強い西風が吹き、とくに冬期は大時化のつづく海面として、航海者から恐れられていた。[21]

伊8がイギリス機の索敵を避けて、この荒天海域に突入したのは、七月一一日のことである。内野艦長は、第一便

の遣独艦（伊号第三〇潜）の遠藤艦長より、この海域を通過したときの苦心談を呉出港前に聞いていた。とても無事には、この荒天海域を脱せそうにもない。伊30の場合、この海域で激浪が主機械排水管より逆流し、そのため両舷の主機械とも故障し、一時電動機航走をつづけ、かろうじて同海域を脱出したのであった。[22]

伊8はこの〝ローリング・フォルティス〟に突入するや、案の定、各所に故障が生じた。まず上甲板の揚蓋が流出し、所々に穴があいた。飛行機射出装置の側板も浪に流された。そればかりか左舷の飛行機格納筒前方の側板も剝ぎとられ、そこに三メートルほどの大穴があいた。激浪が艦の上部構造物にぶち当るたびに、鉄板がばたんばたんと音を出すので、艦橋の見張り員はひやひやした。やがて内野艦長より破損箇所の応急処置の命が出ると、掌水雷長泉豊兎中尉の指揮のもとに、甲板の下にもぐってハンマーやタガネで破損箇所の修理に当ったり、[23] 穴があいた所は艦内のすべてのワイヤーロープやマニラロープを用いて縦横にしばり、波の勢いを弱めることに努めた。[24] 命がけのその作業は、激浪の中で行なわれたもので、困難な辛い仕事であった。

水上航走や潜航を試みたが、天候は好転しなかったので、内野艦長はついに敵の哨戒圏に入る危険を冒す決心をし、七月一九日進路を二七〇度から三〇〇度に改めた。同月二一日一〇日ぶりでついにこの暴風圏を脱出した。内野艦長は戦後、『証言・私の昭和史4』の対談の中で、当時の辛苦を「わたしが長い海上生活の中で、あのくらい長いしけ、ひどいしけは初めてでありました」と回想している。

喜望峯沖を無事通過し、大西洋に入ると、海は一変しておだやかになり、艦はひたすら北上をつづけた。艦内には林上等兵曹の工夫でレコードの曲[25]が流され、それが倦みつかれた乗組員の心を慰めた。七月二四日、在独海軍武官横井忠雄少将からの第一電を受信した。電文は、「無事、大西洋海域ニ進入セラレタモノト拝察スル」にはじまり、航路・敵情（アセンション島付近の哨戒情況）などを伝えていた。伊8は無電発信を禁じられていたから、わずかに〝了

解符〃だけを打ち、ひたすら無線封止をつづけて北上した。

三　アフリカ洋上で独潜U一六一号と邂逅

七月二九日、伊8は南緯一一度西経二〇度――アセンション島の西方約四〇〇マイル――の地点に到達した。このときドイツからの第二電を受信した。それには安全性を考慮して、到着港はロリアンからブレストに変更になったこと、アゾレス群島の西方海上――北緯三九度〇〇分、西経三三度三〇分の海上で、Uボートから最新の電波探知機（逆探）を受けとり、それを装備しビスケー湾に突入するよう指示するもので、また指定会合点到着予定日を知らせ、とあった。

それまで伊8は、受信だけをこととし、発信はほとんど行なわずに来たが、「八月一日赤道通過、一一日アゾレス会合点着」と返電した。伊8が発信したこの電報は、イギリス側に傍受されたらしく、三一日艦尾方向に飛行機を発見したので、艦は直ちに急速潜航した。どうもこの飛行機は、アセンション島（イギリス領の火山島、アフリカ西方の南大西洋に位置）の基地から飛び立った哨戒機かと思われた。内野艦長は、赤道以南のこんな海域まで敵機が哨戒するようでは、無線使用はよほど慎重にせねばならぬ、と痛感した。

八月一日の夜半[26]、伊8は赤道を通過し、冬期の喜望峯沖から、再び熱帯圏に入った。艦内の湿度は異常に高く、乗組員は全身汗と脂（あぶら）にまみれていた。八月四日、在独武官から第三電（「機密第八〇九番電」）が来た。それには、伊8に装備する電波探知機の完成がおくれているので、アゾレス西方における会合点着は、早くとも八月一六日に変更せられたい、とあった。さらに新会合期日を知らせるまで、北緯二〇度、西経三五度を中心[27]とする三〇〇マイル圏内

で待期せよ、行動遅延のため補給の必要があれば、その旨通報せよ、と伝えてきた。この機密電に接した乗組員は、いささか失望[28]を禁じえなかった。内野艦長は、欠乏品について士官に調査させたところ、油と真水はまだ充分であるが、副食物だけが不足していることが分かり、折り返し、危険を冒して次のように返電した。

「八月八日現在量、糧食九月五日マデ、燃料二〇昼夜分、差シアタリ補給ノ必要ナキモ、ナルベク八月中ニ入港デキルヨウ取計ワレタシ」。

伊8は、独潜との会合予定日までまだ十分な日時があったので、速度を落して北上を続けた。昼間は潜航し、夜になると水上航走した。八月一三日にいたり、第四電を受信した。会合は八月二〇日に決定したこと、伊8と会合する独潜（U一六一号）は、目下ビスケー湾（フランス西岸からスペイン北部にかけての大西洋の湾）を西航中であること、危険海域を突破できたら貴艦に改めて会合期日を知らせること、会合時における味方艦の識別法、会合に失敗した場合の方位測および会合法など、こと細かに指示された。

艦が大西洋海域に入り、夜間水上航行していると、ドイツDNB[29]のニュースがよく入るようになった。電信兵はそれを受信すると、文官山中静三と軍医長小谷順弥が日本語に訳し、艦内新聞として回覧した[30]。八月一〇日ごろのニュースは、数日来、シシリー島のドイツ軍は連合軍に押され気味であり、イタリア本土へ退却しつつあることを伝えるもので、ドイツ軍の旗色が悪いことが知れた。乗組員一同、ドイツからのニュースに接するつど、緊張の度を加え、またときに暗然として声がなかった。

八月一五日、第五電（「機密第八七一番」）を受信した。「会合期日ヲ八月二〇日、ドイツ時間一二時、会合点北緯三九度西経三二度三〇分」とあり、合わせて会合点付近の敵情なども知らせて来た。伊8はペナンを出帆して海にあること五〇余日、この間陸影は一つも見ることはなかった。艦の位置は、もっぱら航海長吉田太郎太尉による日中の

太陽と朝晩の天測によって知った。指定地点で独潜と会合する前日は、とくに夜間天測までして艦位の正確を期した。やがて八月二〇日の朝を迎えた。独潜との会合日である。空は曇っており、時々雨が降った。海上はやや時化ている。おまけに視界もよくない。内野艦長は指定地点で見張員を総動員して四方の海を探しつづけさせたが、独潜はいっこうに発見できない。三時間が経過した。第二の手段として、予め取り決めてあった方位測定を行なった。独潜が伊8の近くにいることはたしかである。かすかな電波によってそれが知れたからである。

伊8は会合点で待期することにした。が、なかなか相手と会えない。内野艦長は思い余って、危険覚悟で電波（指定符号）の発信を命じた。[31] もしその電波が敵側に捉えられようものなら、攻撃される危険だってあり得る。幸い独潜はそれを捕捉し、方位測定をしたことを知らせて来た。

午後三時一〇分、一六〇度の方向の水平線上に小さな黒点を認めた。待ちに待った独潜か、それとも敵艦船か。内野艦長は万一の場合に備えて、総員を急速潜行配置につけ、潜望鏡によってその黒点を凝視しつづけた。やがて艦橋が、次に上甲板が見え出した。まぎれもない待望の独潜である。独得の艦の形といい、白い塗料といい、それが日本人の眼にはとても印象的に写った。[32] 内野艦長は浮上を命じた。この独潜（U一六一号）は伊8に近づくと、その右舷指呼の距離に停止した。海は相変らず時化ていて、独潜の甲板は時折波に洗われている。やがて伊8より舫銃（もやいじゅう）が発射され、両艦は一本のロープで結ばれ、ゴルボートによって士官一名（ヤーン少尉）だけが伊8にやって来、艦橋で内野艦長に挨拶した。艦長のそばには文官山中静三がいて二人の会話を通訳した。ヤーン少尉（ニュールンベルク出身）は、伊8の艦長への土産としてヘネシーのブランデー二本とレモン数個[33]持参していた。重要な電波探知機（以下、電探と略す）の移載は、海がおだやかになるまで延ばし、明日午前一一時に同じ地点で再会することにした。それまで両艦は潜っていることになった。

翌八月二一日、伊8と独潜はふたたび会合し、このとき電探の装備と取り扱いを指導するための下士官と兵各一名が伊8に移乗した。ドイツ海軍のこの電探（「逆探知機メトックス」）は単純な装置であった。それについて軍令部嘱託山中静三は、次のように語っている。「この電探機は相手方の発信電波を捕える受信専用機種であって、一名の操作員が艦橋で受信用アンテナを緩慢に手動で回転させて、捕えた電波を艦橋下にある電信室の受信用スクリーン上に映すのである。この映像のなかに現われる電波の波長をみて、移乗してきたドイツ側下士官は、これは英空軍のものであり、これこれの波長はドイツ側飛行機のものであるということを、本艦の電信員に教えるのである。もちろん、敵側の電波を感じたら、その強度に応じて、艦は急速潜航を要するのである」

伊8では海上が静かになったこの日、早速、山中の通訳でヤーン少尉とドイツ下士官（通信兵）らが協力して四時間かかって電探を装備した。日本人が驚いたのは、その装置がじつに簡単なものであったことである。電探の受信空中線は鉛筆の長さ四〇センチほどの真鍮（しんちゅう）の棒二本である。それを潜望鏡支基上部に取りつけ、受信機は司令塔に置くことにした。スクリーンに映る受信波（緑色）は、日本のものよりはるかに鮮明であった。敵の発信電波を捕える役はドイツ下士官の役割で、受信波の判読はヤーン少尉が行ない、潜水するかどうか決めた。

ドイツ側からのこの貴重な贈物に対して、内野艦長はコーヒーを愛好する独潜の乗組員のためにマレー産のコーヒー斗缶を贈ると、かれらは大層よろこび、先任将校が艦長（アルブレヒト大尉）のタイプで打った礼状をもってわざわざ来艦した。すでにドイツでは代用コーヒを飲んでいたから、この贈物はよほどうれしかったものと思われる。艦長の礼状の文面は次のようなものである。

Sehr geehrter Herr Kapitän!

Für Ihnen lieben Morgengruss, der uns heute unseren traditionellen Sonnabendmittagskaffe verschönern wird, sage ich Ihnen zugleich im Namen unserer Besatzung herzlichen Dank.

Ihnen und Ihrer Besatzung wünschen wir allezeit glückliche Fahrt und rufen Ihnen unseren Spruch zu "Heil und Sieg und fette Beute."

Mit Kameradschaftlichen Grüssen
bin ich
Ihr ergebener
Albecht Achilles
Kapitänleutenant

艦長に呈す！

貴官からの親愛な朝のご挨拶に対し、私は本艦乗組員を代表して心からお礼申しあげます。このご挨拶により、われわれの伝統である本日の土曜日午後のコーヒーを、いっそう飾ってくれることでしょう。貴官ならびに貴艦乗組員に対し、われわれはいつも航海の無事を祈りますとともに、われわれの合言葉である「無事と勝利と大きな獲物を」と、声を大にして叫びます。

アレブレヒト・アヒレス大尉
（山中静三訳）

やがて日独の潜水艦は、お互い武運長久を祈り、別れを惜しみつつ離れて行った。伊8と別れたU一六一号は、再び大西洋の通商破壊戦に従事すべく出撃したが、不幸にして同年九月二七日、南緯三〇度一二分、西経三五度三五分

の地点で撃破された。生存者はいなかった。[34] 伊8は独潜と別れると、アゾレス群島（北大西洋中東部に位置）の西方を北上しつづけた。士官室におけるドイツ語の授業は、独潜と会合した八月二〇日以後、取り止めとなった。伊8は北緯四二度に達したとき、針路を九〇度にとり、一路ヨーロッパ大陸のスペイン西岸へと向かった。

八月二二日、伊8は独潜から受け取った電探の操作と性能をテストするため、日中水上航走していると、早くも電探のスクリーンに波の波長が現れたので、急速潜行した。この日以後、艦は充電のため五、六時間水上航走する以外、終日潜行をつづけた。またこの日、在独日本海軍武官から入電があり、ビスケー湾への進入航路、敵情、伊8潜の出迎え方法などが指示された。

一、敵機、敵艦はもちろん中立国の船舶にも絶対発見されぬように行動すること。

二、スペイン沿岸に達したら、距岸五マイル、水深一〇〇メートルにて北上し、フィニステレ岬（スペイン北西部）よりオルテガル岬（ビスケー湾の南西限をなす）を経て、ビスケー湾に進入すること。

三、ビスケー湾奥における独海軍との会合点は、北緯四四度三分、西経四度五四分とすること。会合時間は、ドイツ時間の午前七時四五分。

四、巡洋艦一隻、駆逐艦五隻から成る敵の哨戒部隊がオルテガル岬付近で哨戒中である。

五、伊8がオルテガル岬を通過するとき、独空軍はこの哨戒部隊を攻撃するので、その混乱のすきに突破をはかって欲しい。

六、会合点到着日を報告せよ。

以上の指令に対して、内野艦長は、「会合点到着日ハ八月三〇日」と返電した。伊8が無事目的地のブレスト港に到着できるかどうかの成否は、ここ数日間の航海にかかっている。伊8は八月二七日の仏暁、スペイン沿岸に達した。

が、早くも夜半に強い電波感度があったので深く潜航した。約二時間後に再び浮上してみると、またスクリーンに波長が現れたので、しばらく深度航進をつづけた。すると突加、「ガーン」といった爆雷音のようなものを感じ、一同、爆雷攻撃が始まったものと思い、覚悟を決めた。ヤーン少尉によると、それは数十マイル先で落されたものであって、とくに本艦を狙ったものでない、という。それを聞いて少しは安心したが、爆雷音（英空軍による時限爆雷、Uボートに対する神経戦を目的とする）は七回も聞いたので、やはり不安は隠せなかった。

八月二八日、びくびくしながら隠密行動をつづけて来た艦は、フィニステレ岬の南西六マイルの海上に浮上した。このとき内野艦長をはじめ見張り員たちは、上甲板ばかりか、艦周辺の海に、おびただしい夜光虫の光をみて愕然とした。おまけに艦尾にもそれが尾を引いて光っているではないか。艦の存在が敵側に分かりはすまいか、と思うと一層不安に駆られた。またこの沿岸の灯台の光力は強いことで知られており、もし距岸五マイルで、その光の中に艦が入ってしまうと、発見されそうな気がした。そのうちに伊8と同じような艦の航跡を発見したので、内野艦長は敵かどうか、ヤーン少尉に尋ねると、帰港中のUボートだと答えた。加えてこの付近は中立国の船の航路に当っており、またトロール船と漁網が多く、伊8は潜航中、それらを避けるのに苦労した。[35]

伊8がフィニステレ岬に次いでオルテガル岬沖の潜航突破に成功したのは、八月二九日の夜のことである。翌三〇日の予定会合点に達するまで、なお数時間の余裕があったので艦は長時間潜航をつづけた、また補給の状況を調べてみると、食糧と燃料のほうはまだ少し余裕があるが、水は八月いっぱいしか持たぬことが判明した。

四　ブレスト入港

八月三〇日の朝が明けた。空は晴れ、波も静かであるばかりか、視界も良好である。伊8は、針路を東に採ったまま、一路会合点に向かった。東の空はしだいに明るくなって来た。やがて水平線上右二〇度に黒点一つ、さらに左舷四〇度にも黒点を発見した。その黒点は徐々に大きくなり、程なく三隻の艦影がはっきりして来た。それら三隻の小艇は白波を立てながら高速でこちらに向かっている。ヤーン少尉の説明によれば、どれもドイツ海軍の最新式の防水雷艇だという。それらの水雷艇は伊8の周囲に集まると、司令艇が艦橋にいるヤーン少尉に、メガホンでいろいろ指示を与え、さらにそれは内野艦長にも伝えられた。それより伊8は、司令艇のあとに続き、他の二隻は艦の左右約一キロほどの所に占位し、ビスケー湾を北上した。上空にもドイツ空軍の護衛機が配され、さらに東方の海にも駆逐艦が待機していて、万全の護衛態勢が整えられていた。

八月三一日の明け方、伊8はついに六〇余日の苦しい航海のすえ、無事ブレストの港口に達した。多数の哨戒艇、機雷原突破船などに護られ、錨地の奥深く進み、さらに午前一〇時半ごろブンカー内に横付けになると、パリ在住のドイツ海軍西部管区海軍長官テオドール・クランケ大将とブレスト潜水隊司令ヴインター少佐その他の幕僚たちが、日本海軍代表委員阿部勝雄中将、海軍武官横井忠雄少将などと共に来艦した。かれらは内野艦長をはじめ士官らと固い握手をかわしたのち、甲板に整列した伊8の乗組員たちを閲兵し、苦労をねぎらった。それより数名の当直員を残し、ドイツ海軍儀仗隊が演奏する曲を聞きながら、艦長を先頭に桟橋を渡った。そこに待機していたのは手にカーネーションの花束を抱えた妙齢のドイツ女性たち四、五名である。彼女らは日本人乗組員一人一人に握手した上、カーネーションを胸に一本一本さしてくれた。この意外な歓迎ぶりに、士官から水兵に至るまで、「嬉しくて疲れもふっ

飛んでしまった」[36]ということである。桟橋で出迎えた日本海軍士官の中には、江見哲四郎中佐（伊8の前艦長）や友永英夫技術少佐（のち帰任の途中、Uボート内で自決）などの姿もあった。

やがて内野艦長をはじめ乗組員一同は、出迎えの軍用バスに分乗して、基地内の宿舎（兵舎）へと向かう。だらだら坂を上ってゆくと、眼下にブレスト港を見下す高台に出る。皆、今入港して来たばかりの水道を深い感懐をもって眺める。道路のきわの青々とした草木すら、十分心をたのしませてくれる。右手に灰色のブレスト市街を望見し、程なくすると、基地の中に入る。軍用バスから降りるとき、胸のカーネーションの良いかおりがプーンと鼻口を伝って来た。伊8の乗組員らが案内されたのは、おそらくブンカーの建物のすぐ裏手の丘陵に在る基地（現在は海軍兵学校（エコル・ナヴァル）となっている）であろう。上曹石倉武夫は次のように回想しているからである。

「此の基地隊は嘗（かつ）てはフランスの海軍兵学校として衆の範となり、若い生徒の修養と訓練の道場たりし所、兵舎は五棟、三階の石造りにて、其の内部たるや贅沢の極を尽してゐたと。今はドイツの手に依り質素に作り換えてはあるが、其の構造を一見して昔を忍ぶに足る」（「訪独記」）

さて、軍用バスを降りた伊8の乗組員らは、ドイツ海軍が用意した歓迎会場へと向かった。案内された所は、建物内のある大きなホールである。大きな部屋の正面には、ドイツ自慢のUボートの絵が架けられている。その左右は日独の軍艦旗をもって飾り、さらに長いテーブルが三つ置かれていて、その上には無数の花が並べてあった。

一同、席につくと、クランケ大将とその幕僚の将校らが入場して来た。伊8の乗組員は一斉に起立し、この将軍に注目の敬礼を送る。

祝杯の準備ができ、クランケ大将の祝詞と内野艦長の答詞がおわって乾杯した。通訳を勤めたのは横井武官であり、両人のことばをそれぞれの国語に訳した。かくして宴は進んだ。ほろ苦いビールの味が五臓六腑にしみわたって来る。

二ヵ月あまりの間、汗と脂にうす汚れ、陽光を浴びることなく艦内で暮らしたため、日本人の顔はほとんど一様に青白い。ビールのアルコールがまたたく間にきいて来て、早や紅潮を来たし、それぞれ思い思いに話し出す。石倉上曹もすぐる航海をいまいちど静かに思い返した。艦は何度も危い目に遭い今日にいたったが、今思い出してもぞっとするのは、例のスペイン沿岸を夜間四、五日航行したときの薄気味の悪い〝夜光虫〟の光である。やがて歓迎会は終わり、解散となった。石倉上曹は、ほろ酔い機嫌で屋上に出ると、初秋の太陽が地上を照らしていた。そして防塞気球が三つ四つ浮んでいる空を見上げた後、「あ、何と言ふ良い気持ちか」[37]と、続けさまに二、三回深呼吸をやり、次いで花園の方へと歩いて行った。

伊8の乗組員に与えられた宿舎（兵舎）は、「Prien（プリエン）」と呼ばれる建物である。奇襲攻撃によって大きな戦果を上げた、Uボートの青年艦長の名を採ってつけたものである。その夜、日本人一同は、久々に柔らかなベッドの上で疲れた体を休めることができ、快眠を得た。……

五　ブレスト滞在とパリ見物

翌九月一日、一同、軽音楽を耳にしながら、目をさました。朝食が待っている。コーヒに二片のパン。それもまた珍しく、おいしかった。けれど昼になる前に、腹の虫がしきりと唸るのである。昼食には、純日本料理が出された。日本人コックをわざわざ呼び寄せ、数名のドイツ人コックに調理法を教えて出したものである。その和食は、内地（日本）の一流料理店であれば優に三〇円は下らぬごちそうであった。[38]この日、日本人乗組員のために園遊会が催された。日独の潜水艦乗りたちは、互に杯を交わし、身振り手真似で、年齢や名前や特殊なマークを尋ね合ったりした。時に

は教わったドイツ語を手帳から探し出し、変な発音で、片言会話を試みる者もいた。お互い、とりとめもない雑談を交わし、互に笑い合い、ともども楽しんだ。

夜になると、兵舎の食堂（カンティーネ）で再び宴会が催された。無精髯を生やした入港したばかりのUボートの乗組員らと雑談と軍歌に興じる。楽隊を囲んで静かに杯を重ねているうちはよかったが、アルコールが回って来ると段々にふざける者、歌う者が出てくる。ドイツ人の帽子と交換して悦に入っている者もいる。コニャック、リキュール、ビールなど酒はふんだんにある。それをチャンポンに飲むものだからたまらない。酔いは早く、頭の中がもうろうとして来る。一人のドイツ人が軍歌「英国打倒の歌」(Engellandlied. ヘルムス・ニールが一九一四年に作詞したドイツ軍歌の名曲の一つ）を歌えば、日本の下士官の一人が、日本軍歌を歌い、さいごに「万歳」を張り上げて叫ぶ。この日は入浴し、ゆっくり休んだ。

九月三日から艦の搭載物品の陸揚げや艦の修理などが始まった。物品の陸揚げは二、三日かかった。が、艦の修理作業はその後も長くつづいた。その作業はドイツ兵の監視のもと、イタリア人やフランス人の徴用工の手で進められたから、伊8の乗組員が作業振りをいちいち点検せねばならなかった。昼間は艦で作業に従事し、夕方宿舎に帰り、夕食後はブレスト市街への外出が許可された。外出のときはドイツ軍の軍用バスが迎えにきてくれる。いつも機銃を持った護衛兵が二名付いた。バスの窓はどれも金網が張ってあったのはテロ対策の配慮である。伊8の乗組員は、かくしてバスで市へ出ると、買物したり、遊んだりし、午後一〇時ごろ宿舎へ戻った。

また、ブレスト入港後、Uボートの回航員や伊8の乗組員の保養のため、約四〇名ずつが交代で、数日間、ブレスト郊外の「シャトー・ヌフ」というドイツ潜水艦の保養所（以前はフランス貴族の館であった由）に静養に行った」（山中静三）ということである。これはシャトーヌフ・デュ・ファウ Châteauneuf-du-Faou に在った「トレヴァレの

城」(Le château de Trévarez) のことで、とくに「バラの館」(Château rose)の建物は、Uボートの乗組員（士官）の休息所となっていたものらしい。この城は、一九四四（昭和一九）年七月三〇日に英空軍の空襲に遭った。[39] ともあれ、半舷ずつこの保養所に入った日本人は約二週間、「何もすることはなし、考えることもなく、本当に身も心も休めた」（上曹西尾周作）ということで、長い航海の疲れを充分にいやすことができた。

一方、乗組員は、二組に分かれ、二泊三日の予定で早くも第一班は九月二日にパリ見物に出かけた。服装は全員第一種軍装である。ブレストからパリ見物の第一陣に入ったのは、内野艦長・上捨石先任将校・田渕機関長・吉田航海長・大竹砲術長・小谷軍医長ら階級が大尉以上の者五名、さらに通訳として戦前横浜にいて貿易商をしていたドイツ人ヤコフ（少尉相当官）ほか、下士官・水兵ら四〇名ほどが同行した。これらパリ行きの第一班が、ブレストの駅舎より二等車に乗りパリを目ざしたのは、九月二日の日暮れ時、太陽がまさに西に沈もうとするときであった。車中の日本人の大半は、今回が初めてのパリ訪問である。花の都パリのことは、子供の頃学校で教わり、あるいは映画で観、あるいは本で読んだ程度のことしか知らず、夢の国であった。

伊8の乗組員とUボート回航員を乗せた汽車は、サン・ブリュ、レンヌ、ル・マンを経て、パリのモンパルナス駅へ向かうのである。ドイツ占領下フランスの汽車はどれも軍用と民間用に区別され、各車輌の中間には数門の機銃と機関砲を装備し、つねに対空警戒やレジスタンスに備えていた。ブレスト市街を出た汽車は、程なくすると見渡す限りの平野に出、一直線上にひた走る。山や丘陵らしきものは無く、眼に入るのは、たんたんたる畑や雑草がはびこった牧場、農家だけである。平時であれば、まことにのどかな田園風景そのものである。汽車は日没を待って、厳重に灯火管制された。遮光幕が下される。天井の豆電球がともされ、それが鈍い光を放つ。その光では、お互いの顔がどうにか判別できる程度である。英空軍の夜間空襲が珍しくないだけに、止むをえぬ措置である。九月のヨーロッパの夜

は、さすがに冷える。車中の日本人は身を寄せ合いひそひそ話をしているうちに、一人二人と夢路にたどりついた。[40]その間にも、汽車はガタゴト音を発しながら線路の上を驀進する。

石倉上曹は何時間眠ったであろうか、ヤコフ氏に起こされ、「もうすぐパリ郊外ですよ」といわれた。窓を開け、窓外を見ると、ひんやりとした朝の大気が車内に入って来た。東の空に太陽が顔を出し、光を放っている。

すでに目をさましている者もいる。かれらは車外の珍しい風景に見入っている。煙突の付いた灰色の細長い建物が眼に飛び込んでくる。どの家の日除けも赤や緑のペンキが塗られている。汽車はその後一時ほど走って、パリのモンパルナス駅に着いた。が、折から構内は汽車で一杯であり、プラットホームに入れない。やむなく一同途中で下車することになった。やがて当地の海軍事務所の主計中佐（氏名不詳）と四方書記、ドイツ軍の写真班などに迎えられた。そしてすでに用意してあった軍用バスに分乗すると、マロニエの街路樹の間を走り、とある大邸宅（場所不詳、元金満家のユダヤ人の持物）に導かれた。[41]そこはパリの海軍クラブのような建物であった。一行は同建物の大きなホールに案内され、そこでドイツ軍の楽隊が演奏する軽音楽を聞き、食事を摂り始めてしばらくすると、空襲警報が鳴った。一同急いで地下の防空壕に飛込んだ。

花のパリ、たしかに見るべきものは沢山ある。内野艦長以下の第一班は、パリ滞在中、ベルサイユ宮殿を訪れ、凱旋門・エッフェル塔・ノートルダム寺院・廃兵院を見学し、セーヌ河岸を散策したり、家族に土産物などを買い、夜は「カジノ・ド・パリ」に招待された。[42]しかし、たびたび空襲があったり、警報が鳴るのでそのつど退避せねばならなかった。けれどのんびりとくつろぐことができ、記念の写真も撮ってもらった。ノートルダム寺院の裏手やエッフェル塔を背影にして横隊で撮ったものが残されている。

六　内野艦長らのベルリン訪問

内野艦長ほか五名の士官（太尉以上）とドイツ人ヤコフは、パリ見学が終わった九月三日の夕刻、パリの北駅よりベルリンへ向かった。が、一行のだれひとりとして、ベルリンまでの経路をはっきり記憶してはいない。汽車は爆撃で破壊された箇所を迂回して走ったし、日が暮れると灯火管制のため遮光幕をおろしたままであったからである。ともあれ、ドイツ側が内野艦長一行のために用意した列車は、小机・洗面台を備えた寝台車であり、仕切り客室（コンパートメント）になっていた。ベルリンまでの途中、連合軍の空襲によって壊された蒸気機関車の姿が数多くみられた。[43] 列車がベルリンのツォー駅に着いたのは翌四日の午前中である。当時は連合軍によるベルリン空襲が激しいときで、市街の各所はがれきの山で、広場にはベトンで固められた退避壕や機銃座がみられた。

一行はベルリンに着くと、ティアガルテンの森の中にある日本大使館（ティアガルテン街六番地、現存）と日本海軍事務所（大戦中、消滅）に寄り挨拶した。とくに日本大使館では、米飯と味噌汁といった和食をごちそうになった。歓迎パーティのあと、国立オペラ劇場でオペラを観、その夜はヴィルヘルム広場に近いモーレン街の「ホテル・カイザーホフ」（総統官邸と道路一つ距てた所に位置）に一泊した。が、夜中に空襲警報が鳴り、たたき起され、直ちに地階に避難する破目になった。五日は「放送タワー（フンクトゥルム）」（Funkturm, 一九二六年に建設）に登った。それは高さが一五〇メートルあり、エレベーターで天辺まで登ると、ベルリンの市全体が眺望できた。東の市街地、西の森や湖がみえ、また市街の建物は、黄・緑・黒で迷彩（カムフラージュ）されており、さらに池や湖水は、網や木の葉で覆われ、光らないようにしてあった。一つには空爆のさいに位置をさだめる目標とならぬようにするための措置である。[44] 一行は、この放送タワーの地上五〇メートルの所にあるレストランでお茶の接待を受けた。ベルリン大学も見たが、折から夏

休み中であったので、構内には入らなかった。

それより一行は、高速道路（アウトバーン）を車で走ってポツダムに行き、ブランデンブルク選帝侯が一八世紀に別荘として建てたという「サンスーシ宮殿」の赤レンガの建物や庭園などを見学した。翌六日の朝、一行はベルリンを汽車にて発ち、独仏の国境（マジノライン）まで来たとき、検札があった。このとき、内野艦長以下五名の士官は背広姿であった。ベルリンの日本海軍事務所を訪れたとき、海軍武官横井忠雄少将の忠告により各自軍服をトランクに入れ、着用しなかった。ところが、通行証の風体の欄には「制服を着た日本潜水艦の乗組員」と書き入れてあったから、文句がつき、トランクから軍服を出して見せ、やっと事なきを得た。帰途、通訳は同行せず、軍医大尉小谷順弥がその代役を勤めた。パリ到着後、内野艦長の一行は、パリ見学の第二班の連中と同行し、ブレストに帰った。

ブレストのブンカー内に入っている伊8は、帰国の準備を着々と進めていた。ブレストに在泊中、林上等兵曹以下の通信兵三名は、江見・松井両中佐や桑島中尉に引率されて、ベルギーのオーステンデ（ブリュッセルの北北西一一五キロ、北海に臨む港町）の電探学校で数日、電波探知機の操作法と故障発見法について講習を受けた。当時、オーステンデは平和な町の印象をあたえ、静かであった。しかし、商店は少なく、食料は不足していた。ブレストに比べると、電探学校の食事は粗末であった。バターやチーズ類にお目にかかることはなく、町の八百屋に行っても果物はほとんどなく、桑島斎三中尉などは、空腹のあまり、野菜や玉葱（たまねぎ）を求めて食べたという。[45] また森岡一曹以下五名（第一班）、奥田兵曹以下四名（第二班）の下士官兵と文官山中（通訳役）は、ビスケー湾に臨む南仏のミミザン（不詳）の海軍対空機銃学校で、機銃の分解・組立て・射撃理論・実弾射撃を教官のシュミット少尉と助教ジコフスキー兵曹から教わった。

ドイツ兵の監視の下、イタリア人・フランス人の徴用工を使って故障箇所の修理を行なっていた伊8は、電波探知

機・四連装二〇ミリ機関砲をUボートと同じように後甲板に取付けた後、ブレスト湾内に出、何度か試験潜航と射撃訓練を行なった。ブレスト出港が一〇月五日と決まると、食料や物品の搬入が忙しくなった。西尾上曹が積込主任を命じられ、ドイツ兵の協力のもとに作業に当たった。主食の米は南仏やイタリア産のものが用意され、飲物・調味料・タバコ類のほか、後述の兵器・機械類を艦内の空間はもとより、飛行機格納筒・魚雷発射管（六基に装塡されていた魚雷八本のうち四本を陸揚げした）・予備魚雷格納筒・弾薬庫等まで使って、満載した。[46]

また訪欧のときもそうであったが、今回も多くの便乗者がおり、帰国便に日本人やドイツ人ら計一四名が乗り組んだ。

横井忠雄少将（駐独日本大使館付海軍武官）
細谷資芳大佐（駐仏日本大使館付海軍武官、中佐より昇進）
築田収大佐（造兵監督官）
吉利貞（軍令部嘱託、予備役海軍中佐）
中島元弥（同右）
南了主計中佐、伏下鉄夫主計中佐、技師阿部末吉、会計書記原鑒、書記坂本利雄
ラインホールド陸軍少佐（駐日ドイツ大使館付陸軍武官）、海軍技師ステッケル、アトラス社技師シフナー、ゲーマ社技師ブリンカー[47]

七　ブレスト出港――一路故国へ

一〇月五日午後三時半、伊8はすべての準備をおえ、ブンカーを出て帰国の途についた。同艦のこれからの行動は秘匿されていたから、スパイの眼を恐れて、岸壁では一切行事は行なわれず、軍楽隊の賑やかな演奏もなかった。やがて錨地の外に出ると、大勢の日本人を乗せた曳船が一隻待機していた。かれらは帰国命令を受けながら、帰国の途を閉ざされ、独仏に留まることを余儀なくされていた人々である。かれらは望郷の念やみがたく、伊8と別れを惜しむために待機していたものだが、盛んに帽子を振っている。伊8はこの曳船と同行しながら港口へ向かった。やがてこれら残留邦人の間から「軍艦マーチ」が歌われ始めた。それは帰朝の途につかんとしている同胞に対する惜別と海路の平安を望む叫びであったが、見送る側の人間にすれば、複雑な心境であったことと思われる。

「祖国に帰る人、戦乱の外国にやむなく止まる人、その気持はそれぞれ違ったものであったと思うが、私はその人々の心中を察して何とも名状し難い感懐に打たれ、その光景は今も眼底に彷彿として残っている」

と内野艦長はそのときの悲痛な光景を述懐している（「訪独完遂伊号第八潜水艦」）。

港外に出ると水雷艇三隻、哨戒艇二隻が待機しており、伊8はそれら五隻の護衛艦に護られながら暗夜のビスケー湾を南下した。翌六日には、護衛艇にさらに八機の護衛機が加わり、何度か試験潜航を行なったのち、いったん浮上し、護衛艇と別れ、再び潜航し、スペイン沿岸へと向かった。やがて進入のとき最も苦労したオルテガ岬、フィニステレ岬も無事に通過し、英米軍の飛行哨戒を避けて、アゾレス群島の南寄りに針路をとり南下をつづけた。最大の危険海域を突破したのは一〇月一七日以後のことであり、ブレスト出港以来、充電航走を除くと、昼夜とも潜航をつづけた。内野艦長は、打ち合わせ通り、通過点を発信するのだが、用心のあまり、A点通過のときは発信しなかった。

そのため日本大使館側では、たいへん心配したということである。けれど一〇月一五日、B点通過時の報告を催足してきたので、一七日そこを無事通過したことを打電した。

一〇月二六日の伊8の位置は、西経二三度五六分、赤道を通過し、ドイツ側との打ち合わせに従い、D点通過を発信し、「無事航海ヲ続ケツツアリ」の報告を行なった。ところが、この電波をアセンション島の英軍基地で捕捉されたらしく、翌二七日索敵機を発見したので、直ちに急速潜航し、事なきを得た。しかし、二八日の朝、再び前日の敵機に発見され、再度急速潜航した。艦が深さ三二メートルに達したとき、大爆音が二発起こり、船体は激しくゆれ、一部の電灯は消え、天井の埃が舞いおち、艦内は白い粉のためモウモウとなった。艦はそのまま潜行をつづけ、深度八〇メートルに達したとき、突如「電池室浸水、一群電池三分の一破損」の報告を受けた。このときはもうだめだ、と一同覚悟をしたが、しばらくすると、「浸水止まり、電池の被害案外少ない」の報告に接し、ほっとした。

この爆雷攻撃で、伊8は測程器（艦の速力を測る）・縦舵舵角指示器・潜航制限装置・管制盤のブレーカーなどに損傷を受けた。が、いずれも艦員の手で修復された。伊8は毎日のように敵機に襲われてはたまらないので、敵の哨戒の裏をかくため、艦の速度を落とし、二日間潜航をつづけた。幸いこの計画は効を奏し、その後、セント・ヘレナ島の哨戒圏を脱出することができた。

一一月八日の日没時、大型客船（じつはスウェーデンの居留民交換船「グリップスホルム号」一八八一五トン）を発見したので追撃した。が、舷側に赤十字のマークが付いていたので攻撃を断念し、元の針路に戻った。三日後の一日、〝ローリング・フォルティス〟の暴風圏に進入した。今回は往路よりも一二〇マイルほど南方に針路をとったことや、時あたかも南半球は真夏にあたり、また追風であったために、往路ほど苦労することはなく、船体の損傷も軽く、無事に突破することができた。

一一月一三日、燃料に余裕がないため、一一ノットで水上走行をつづけていた艦は、この日大西洋海域を去るに当り、在独海軍武官に最後の電報を打ち、ドイツとの交信を打ち切った。「一二月二日ペナン着ノ予定。乗員便乗者共ニ健在。ドイツ通信系ヲ去ルニ当リ、在独中ノ御厚誼ヲ重ネテ深謝ス。ドイツ海軍ニモ連絡ヲ乞ウ」。

一一月一八日、第八潜水戦隊司令官石崎昇少将から「マラッカ海峡ニ敵潜潜入ノ敵情等ニ鑑ミ、伊八潜ハペナン寄港ヲ取止メ、シンガポールニ直航セヨ」の電報を受け取ったので、針路をスンダ海峡に改め、一二月二日そこを通過し、五日シンガポール島のセレター軍港の岸壁に艦を横着けした。ブレストを出港して六一日目のことである。シンガポール到着後、横井少将以下一四名の便乗者はここで全員退艦し、全員空路で内地（日本）に帰った。伊8は、一二月一〇日シンガポールを出港し、対潜警戒を厳にし、水上航走（一六ノット）と潜航をくり返しながら航進をつづけた。

一二月二一日の明け方、豊後水道を通過し、伊予灘に入り、同日の午後、呉海軍工廠潜水艦部前の桟橋に着岸し、ここに任務を達成した。六月一日呉出港以来二〇四日が経過し、その全航程は三四〇〇〇マイルにもなる長途の航海であった。呉帰港後、伊8の積荷は、海軍中佐（氏名不詳）の指揮のもと、数日かけて陸揚げされた。乗組員も交代で上陸を許され、ブレスト・パリ・シンガポールで購入した土産物をトランクに積めて陸上にあがった。ふつう物品は陸に持って上がることは許されなかったが、呉鎮守府長官野村直邦中将の格別の配慮により、伊8の乗組員に限って持物は検査されず、証明書を見せるだけで通用門を通ることができた。そのとき番兵より、「ご苦労様でした」と挙手の礼で通してくれたということである。

一二月二三日、内野艦長は列車で上京し、二五日と翌二六日軍令部と海軍省において、軍令部総長、次長、各部長、担当部員、海軍大臣以下の各将官に訪独任務の経過報告を行った。が、その任務の詳細は海軍部内において秘匿され、

やがて終戦を迎えた。

伊8のその後の運命だが、昭和二〇年三月三一日沖縄方面で米駆逐艦の爆雷攻撃を受けた末、浮上し、激しい砲戦を交えたのち沈没した。一方、ブレストに残ったUボート（もとU一二二四、「呂第五〇一潜」）の回航員（艦長乗田貞敏少佐以下）は、翌昭和一九（一九四四）年三月三〇日ドイツのキール軍港で潜水艦の引き渡しを受け、七月中旬ペナン着の予定であったが、五月一一日以後中部大西洋で消息を断った。戦後のアメリカ側の記録によると、五月一三日米護衛駆逐艦の爆雷攻撃により沈没したとある。[48]

八　むすび

第二次世界大戦中、日独両国がじっさい共同作戦を行なったのはインド洋上における交通破壊戦のみであった。昭和一七年から同一九年の二ヵ年間に計五隻の日本潜水艦がドイツに赴き、うち二隻は帰国途中で撃沈され、三隻は南方の基地（ペナン、シンガポール）に帰って来たが、このうち二隻は沈没し、結局無事に往還全行程を完了し、呉に帰港したのは伊8のみであった。伊8はきわめて幸運な艦であったといえる。これら五隻の遣独潜水艦の主な任務は、陸・海軍、外務省の連絡使（武官、技術者、所要人員）の送迎のほか、特殊物質の輸送、日独の軍事技術の交流にあった。日・独・伊三国は、昭和一七年一〇月の大本営政府連絡会議における決定にもとずき、自給不敗の態勢を確立し、軍事的経済的提携を強化し、太平洋・インド洋・大西洋・地中海における作戦の強化と海上交通破壊戦の徹底、総合戦力を向上させるための原料・資材・技術の融通等に努めることになった。[49] このうち物質についていえば、ドイツは中立国の貨物船に偽装した船を南方や南米に送って物質輸入を行なうのだが、やがて連合国側の巡視（パトロール）艦隊に拿

捕されるようになった。ドイツが欲していた物質は、生ゴム、雲母・錫・タングステン・モリブデン（水鉛、銀白色の堅い金属、特殊銅の合金材料）・キニーネ（マラリアの特効薬）であった。

軍事技術としては、ドイツは日本海軍の最高機密兵器である酸素魚雷の原物および設計図の供与を希望した。が、当初たとえ同盟国であってもそれを譲渡することはためらわれた。けれど第一便の伊号第三〇潜（艦長遠藤忍中佐）は、やや旧式の89式53センチ酸素魚雷一四本をつんでドイツに向った。伊8の場合は、ドイツが渇望する特殊物質のほか、次のような兵器を供与した。

(1) 95式53センチ酸素魚雷二本
(2) 潜水艦自動懸吊装置（設計図）
(3) 潜水艦95式無気泡発射管（設計図）
(4) 最新式（複葉フロート付）水上偵察機（設計図）

(1)は日本海軍の自信作であり、89式53センチ酸素魚雷の新型である。ほとんど無気泡であり、駆走能力も大きく、ドイツの電池魚雷[50]よりも遙かに高性能であった。(2)は海中の一定の深さで停止したまま艦内タンクに注排水して、機関を停止してじっとしておれる装置。ふつう中途半端な深度にいると、最後は浮上するか沈座するかのどちらかになる（木俣滋郎『日本潜水艦戦史』）。この画期的な装置を考案したのは、友永英夫造船少佐である。

また伊8がドイツ側から譲渡され、日本に持ち帰った物件は次のようなものである。次に掲げるリストは、内野元艦長の最近の発見によるもので、小菅昭一郎氏の「訪独潜水艦と持ち帰ったエンジンの運命――エンジンの歴史の一

隅をひそやかに駆け抜け深海に去っていった潜水艦伊8、伊52に捧ぐ」（『内燃機関』33巻10号所収）に引用されている。今、それを参考までに引くと次のようになる。

(1) レントゲン検査装置　一組
(2) 特定ガス切断機　二台
(3) アテブリン錠（マラリアの特効薬）　三四九〇〇〇〇錠
(4) 標準海水　五アンプル
(5) 甲板時計　九七個
(6) 飛行機用方位測定機　一五組
(7) 経線儀（クロノメーター）*　二九個
(8) エングマ暗号機（五・五kg）　一台
(9) 発光塗料および液　一六九台
(10) ダイヤモンドダイス　二四一個
(11) 白金
(12) ボールベアリング　一箱
(13) 高速（魚雷）艇製造図面　一三包一筒
(14) 潜水艦用電波探信儀（「逆探知機メトックス」のこと）*［伊8に装備予定のもの］　一組
(15) 陸上用電波探信儀　一組
(16) 同右図面　五筒
(17) S装置（不詳）*　二組
(18) 絶縁ケラシンク蓄電器　五〇〇kg

(19) 集団聴音機（うち一組は伊8装備予定のもの）　二七包
(20) テレフンケン社無線機製造図面　二七包
(21) ボールド　五個
(22) ボールド射出装置（伊8装備予定のもの）　一組
(23) ダイムラーベンツ高速艇発動機（魚雷艇用ディーゼル・エンジン）ＭＢ五〇一および同取扱い装置（製造図面とも）　一基
(24) プロペラ軸脱換接手製造図面
(25) 給水および復水ポンプ主部図面
(26) ヴィルドトランシット（不詳）
(27) ニッケルカドミニウム電池および栓
(28) シューイングメタル（不詳）
(29) 艦船用五個（不詳）フューメ社製五三、三cm魚雷用（不詳）　一二〇挺
(30) エリコン二〇mm機銃　付属品とも　三〇個
(31) 同右工具および治具
(32) 急降下爆撃照準器（ＰＺＡＩ型）
(33) イリジウム（銀白色の合金材料）
(34) ロジウム（灰白色の金属、メッキに用いる）
(35) ラインメタル（社）一三mm機銃（一三一型）　六基（？）
(36) 同右弾薬包（通常弾・徹甲弾・曳痕弾・演習弾）　各二〇発（？）
(37) 点火栓　ＥＴ7　ＥＴ8
(38) ラインメタル（社）一三mm機銃製造図面
(39) ワグナータービン製造図面

(40) 陸軍事務所託送図面
(41) ハゼリンクリプトグラフ（暗号用タイプライターのことか？）帝国大使館託送品外務省行き　六台
(42) TLKIK, KISIR, YOKOK,　三八五個
太陽ウオッチ社託送品水路部行
(43) ドイツ海軍託送品　四箱
ウェネカー中将宛
(44) ドイツ海軍郵便物　五袋
ウェネカー中将宛
(45) ドイツ海軍ペナン基地双眼鏡　三〇個
ドイツ海軍託送品
(46) 電送印字機　一組
帝国海軍託送品
(47) メトックス受信機（逆探知機）　二台
(48) 無電検査機（(47)(48)はドイツ海軍提供のもので、一部伊8に装備）　一台
(49) 高度飛行用圧力室製造図面および部品
(50) 在東京ドイツ大使館行き託送品
(51) 20mm機銃弾薬見本　一箱
艦本総務部行き
(52) 仏監（フランス）購売無線機械　一組
横須賀軍需部行き
(53) 瑞典（スウェーデン）印字機（タイプライター）　一〇組
(54) 海軍省副官宛書類　八鞄

(55) 軍務局行き書類　一鞄
(56) 艦本会計部行き書類　四鞄

注＝＊は引用者（宮永）による。

ドイツ占領下のブレスト軍港で伊8に搭載し、日本まで運んだこれらの物件の中には、兵器類以外にX線機器や薬品など医療用のものも含まれていることは注目すべきことである。またこのリストの中には見当たらないが、当時ドイツで医学資料の収集に従事していた文部省の派遣者から託されたペニシリンに関する文献が伊8によってわが国に持たらされたという（小菅昭一郎）。ペニシリンはイギリスの微生物学者フレミング（一八八一～一九五五）が一九二八年アオカビから発見し、のちに抗生物質として実用化されたものだが、日本でも戦前にその研究開発が行なわれていた。しかし、実際に用いられるようになったのは戦後のことである。ドイツから潜水艦によって将来されたその資料が、わが国の医学界にどれだけ寄与したものか分らぬが、一つのエピソードとして紹介しておく。舶載品の兵器のうち、モーゼル社製の二〇ミリ機銃（MG一五一型）は、対空機銃に改め二連装としてUボートに装備されていたもので、軽くて操縦性に優れたものであったという。この機銃は、初期の陸軍戦闘機「飛燕」につけられた。[51] またラインメタル社の一三ミリ航空機用機銃（MG一三一型）は、ドルニエD二一七双発爆撃機やユンカースJU88双発爆撃機に装備されていたもので、日本海軍は昭和一八年これをコピーし、二式一三ミリ機銃として量産し、それを双発の新鋭爆撃機「銀河」に装備した（木俣滋郎『日本潜水艦戦史』）。

また伊8で持ち帰った物件の中で最も喜ばれたのは、ドイツの魚雷艇で使用されていたダムラー・ベンツ社製の二〇〇〇PSディーゼル・エンジンMB50－A－3（二四〇〇馬力、全長四メートル、重量四・五トン）であった。

伊8はこのエンジンを偵察機を搭載していた格納庫に入れて日本に運んだ。このエンジンは呉で陸揚げされた後、国産化が急がれていたため直ちに三菱重工川崎製作所に秘かに送られ調査された。が、当時の日本の劣悪な技術力では量産は無理であるとの判断から、国産化は断念された。製造中止の理由としては、㈠約三メートルのアルミ合金製クランクケース（内燃機関の室）およびオイルパン（油受）の鋳造ができぬこと、㈡一体鍛造クランク軸（シャフト）（材質はニッケルクロム銅？）の鍛造（たんぞう）（金属を熱し、圧力を加え成形する）ができぬこと、㈢主軸受のローラーベアリングの精度は日本では不可能なること、㈣シリンダーおよびシリンダーヘッドの一体溶接ができぬこと等によるものであった。[52]

当時の日本海軍は先端軍事技術の研究におくれ気味であったから、ドイツから兵器類をもらい受けることは願ってもないことであった。とくに焦眉の急であったのは、高速魚雷艇の建造であった。元々、日本海軍の首脳部の頭にあった戦法は、日露戦争のときのような砲撃戦による艦隊決戦であり、航空機や小艦による戦いは眼中になかった。ところが南太平洋における物質揚陸の作戦中、商船隊や潜水艦までがアメリカ海軍の魚雷艇（時速四〇ノット以上）のえじきとなり、さらにスリガオ海峡（ミンダナオ島北東端）の海戦では、西村艦隊の戦艦「山城」（二九三三〇トン、艦長篠田勝清大佐）が昭和一九年一〇月二五日アメリカ側の執拗な魚雷艇による攻撃によって転覆沈没するにいたっては、艦砲による戦いを念頭においていた日本海軍にとって大きなショックであった。その結果、魚雷艇の存在価値が再認識され、その建造がにわかに要請されたのである。ベンツ社のディーゼル・エンジンの国産化はついに実現しないまま、終戦を迎えることになったが、戦後間もない昭和二九年に、早くも日本人の技術者がドイツのエンジンに比肩しうる独自のディーゼル機関を開発し、それを海上自衛隊のPT4種、PT11種の国産魚雷艇（いずれも速力は三〇～四〇ノット）に取りつけるまでなったことは感嘆すべきことであり、面目躍如たるものがある。

また伊8がドイツ行において痛感し、反省を求められた点は、当時の日本の電波兵器の立ち遅れであった。伊8が

呉を出港するときに装備した「三式超短波受信機」などは、性能・機能のどれひとつ比べてもドイツの逆探知機メトックスに及ばぬもので、日本は伊8の帰港後、電波兵器のおくれが戦争の帰趨を左右するであろうことに気づき研究をすすめ、「八木アンテナ」[53]なるものを完成したが、時すでにおそく、敗戦は間近に迫りつつあった。……

いずれにせよ、大戦末期、久しく途絶していた日独の交通を潜水艦をもって回復しようとした日本海軍の努力と勇気は、成果の大小は別にして、大いに称賛に値いするものであり、日本人の偉業の一つとして銘記せねばならない。

今から二〇年ほど前になろうか、たしか「NHKスペシャル」は、昭和二〇年五月一三日大西洋上のUボート二三四号（艦長フェラー大尉）の艦内で自決した二名の日本海軍の技術士官（友永、庄司両中佐）のことを取り上げ放映した。ドイツの崩壊を前にして、ケスラー空軍大将は、ドイツ空軍の技術一切を日本に移すつもりで二名の日本海軍の技術士官とU二三四号で日本に向うつもりであった。が、五月七日ヒトラーの死によって、ドイツは無条件降伏した。同艦もデーニッツ元帥の命により、連合軍に投降することになった。が、友永・庄司ら技術将校は、生きながら連合軍の捕虜になることを潔しとせず、自ら死を選んだのである。自らを律するに厳しい日本海軍士官としての誇りと魂を見せたこのドラマは、ひじょうに心に迫るものであった。その後さらに時が経過し、吉村昭の『深海の使者』を見い出し、耽読した。同書は、第二次大戦中、日独両国の連絡使として数次にわたってヨーロッパに赴いた日本潜水艦を描いたものである。先年、NHKが放映した友永・庄司両中佐のドラマと重ね合わせて読むと、当時の遣独潜水艦のことがよく理解できた。その後も戦記ものや軍事雑誌を漁っては味読した。中でも私の興味の中心は、戦時下、ヨーロッパで過ごした邦人の生きざまにあり、その私記や記録も愛読した。

平成六年の盛夏、久々に取材でイギリスを訪れた折、大陸に渡り、遣独潜水艦と縁がふかいブレスト、ロリアン、キールの軍港を見学した。これら三港は、第二次大戦中、連合国の激しい空襲を受け、いずれも港湾と市街地の八〇

%を失なった。けれどブレスト、ロリアンには五〇年前に造ったブンカーが現存し、またキール郊外のラボエにUボート（U九九五号、一九四三年建造）の実物が展示されていた。それらの遺物をひじょうに興味をもって実見したことはいうまでもない。ブレスト、ロリアンを訪れたにはまた別な目的もあった。実は慶応元年（一八六五）一〇月、横須賀製鉄所建設の用務を帯びて外国奉行柴田貞太郎剛中（たけなか）（日向守）の〝産業使節団〟がこれら二港の海軍工廠を見学に訪れていたからである。その資料を何か得たいと思っての訪問でもあった。柴田一行に関しては、その後新資料を得たので別な機会に一文を草したいと考えている。

本稿執筆の直接の動機は、帰国後、古書で伊八潜史刊行会編『伊号第八潜水艦史――伊八潜の輝ける航跡』（非売品、伊八潜史刊行会、昭和五四年三月刊）を求め、繙読したことによる。同書は、伊8の元乗組員の私記を編んだもので、その二七七～三七五頁までが、訪独記の部分である。ブレスト入港時やシャトーヌフ休養所、パリ見物などの写真一六葉添えられていて、ひじょうに興味を引く内容である。そこに描かれているのは、個人的な回想と赤裸々な記録である。が、私は現地において、伊8が収納されたブンカーや旅宿（兵舎）の建物をこの眼で見ていたから、どの記事も生々しく胸に迫り、実感としてよく理解できた。こういった印象は、机上では得られぬ、現場において実見した者だけが享受できるものであろう。かくして『第八潜水艦史』に触発され、一層の感興をもよおし、筆を執ったのが本稿である。

本稿の執筆においていろいろお世話になった方々は多い。元海軍少将内野信二氏からは写真の掲載許可を、ブレスト在住のエミル・ケルネーヴ（戦時中、ブレストのブンカーの徴用工）、ブレスト古文書館のアニー・アンウッド女史、防衛研究所戦史部の調査研究員川野晄明諸氏から資料の提供を得、また海軍用語の疑義について法政大学名誉教授秋田成就氏（元海軍中尉、戦艦「山城」乗組員を経て海軍軍令部出仕）から教示を得ました。記して感謝を表します。

注

(1) 石倉武夫遺稿「訪独記」(『伊八潜史刊行会編　伊号第八潜水艦史——伊八潜の輝ける航跡』所収、伊八潜史刊行会、昭和五四年三月)

(2) 内野信二艦長は、明治三三年八月六日生まれ。鹿児島市出身。大正一〇年七月一六日海軍兵学校卒業(海兵第四九期)、今も健在である。本年八月で満九五歳。

(3) 内野信二「訪独完遂伊号第八潜水艦」(『日本海軍潜水艦史』所収、日本海軍潜水艦史刊行会、昭和五四年九月)

(4) 同右。

(5) 『日本海軍潜水艦史』、三〇二～三〇四頁。

(6) 注(3)を参照。

(7) 『戦史叢書大本営海軍部・連合艦隊〈5〉』(株式会社朝雲新聞社、昭和四九年三月)、五七八頁。

(8) 井浦祥二郎『潜水艦隊』(朝日ソノラマ、平成四年九月)、二五一頁。

(9) 西尾周作「伊号第八潜水艦、いよいよ特殊任務につく」(『伊号第八潜水艦史』所収)

(10) 注(5)の三五二頁。

(11) 注(9)に同じ。

(12) 艦長などが死亡のとき、指揮権をもつ将校をいう。

(13) 岩永賢二「伊八潜の給油訓練とその実施」(『伊号第八潜水艦史』所収)

(14) 吉村昭『深海の使者』(文藝春秋、昭和五一年四月)

(15) 注(9)に同じ。

(16) 桑島斎三「特殊任務の思い出」(『伊号第八潜水艦史』所収)

(17) 山中静三「伊八号潜水艦ドイツ派遣便乗記」(『伊号第八潜水艦史』)

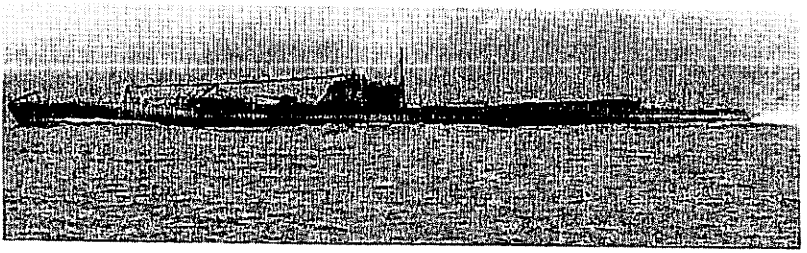
(18) 注(9)に同じ。

(19) 注(14)に同じ。

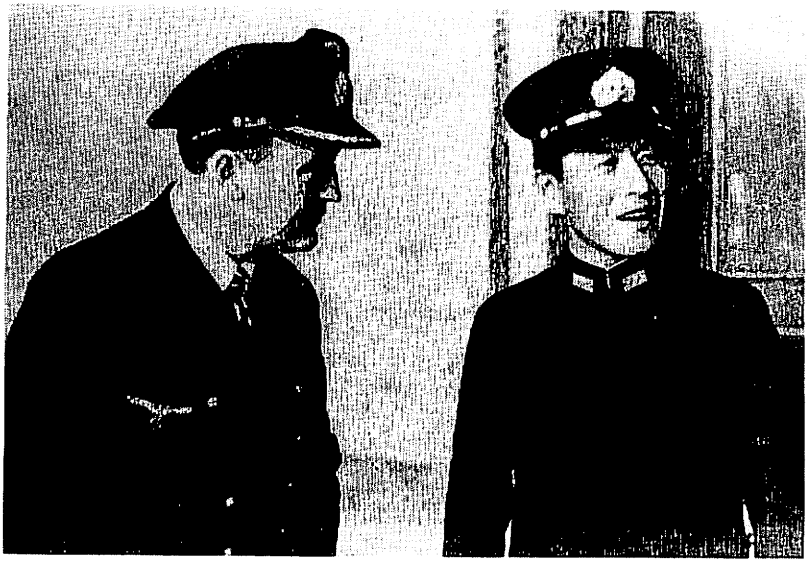
(20) 内野信二「ドイツ派遣」(『伊号第八潜水艦史』所収)
(21) 同右。
(22) 注(3)に同じ。
(23) 注(9)に同じ。
(24) 注(3)に同じ。
(25) 注(16)に同じ。
(26) 注(14)を参照。
(27) 同右。
(28) 注(3)に同じ。
(29) 「ドイツ通信社」Deutsches Nachrichtenbüro のことか。
(30) 注(17)に同じ。
(31) 注(9)に同じ。
(32) 注(16)に同じ。
(33) 注(17)に同じ。
(34) 「第二次世界大戦で沈んだドイツUボート一覧」(ペーター・クレーマー 井崎清訳『Uボート・コマンダー——潜水艦戦を生き抜いた男』所収、早川書房、平成六年七月)
(35) 注(20)に同じ。
(36) 注(9)に同じ。
(37) 注(1)に同じ。
(38) 同右。
(39) エミル・ケルネーブ氏提供の資料(新聞記事)による。
(40) 注(1)に同じ。

(41) 同右。
(42) 注(9)に同じ。
(43) 小谷順弥「訪独作戦の思い出」(『伊号第八潜水艦史』所収)
(44) 同右。
(45) 注(16)に同じ。
(46) 注(9)に同じ。
(47) 注(14)に同じ。
(48) 注(7)に同じ。
(49) 同右。
(50) 木俣滋郎『日本潜水艦戦史』(図書出版社、平成五年八月)、三〇三頁。
(51) 同右、五五七頁。
(52) 小菅昭一郎「訪独潜水艦と持ち帰ったエンジンの運命——エンジンの一隅をひそやかに駆け抜け深海に去っていった潜水艦伊8、伊52に捧ぐ」(『内燃機関』33巻10号、所収)
(53) 橋本隆夫「訪独作戦(作戦の思い出(3))」(『伊号第八潜水艦史』所収)

** 同艦の残がいが、アメリカの海洋研究家ポール・ティドウィル氏によって半世紀ぶりに確認されたといった『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事(一九九五・七・一八付)が『読売新聞』(一九九五・七・二〇付)に最近紹介された。伊52は一九四四年六月二十三日深夜、音響ブイに探知され、百九人の乗員と共に撃沈された。本年五月初旬、ポール・ティドウィル氏が米国海軍の資料に基づいて沈没水域を音波探知器と特殊カメラで調査したところ、水深約五千百メートルの深海の底に横たわる伊52の船体を確認した。この海洋研究家が五年間にわたって伊52を追跡調査したのは、同艦が積んでいたと考えられる金塊二トン(時価二千五百万ドル)探しに夢をかきたてられたからである。現在、その回収計画が進行中とのことである。

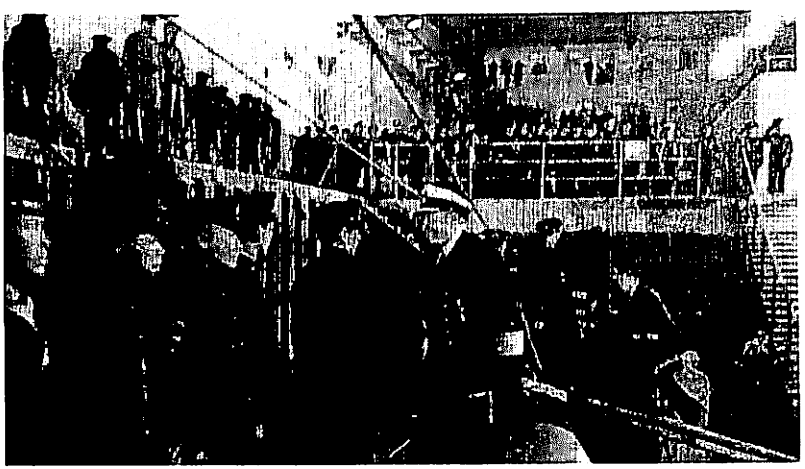


航行中の伊８潜

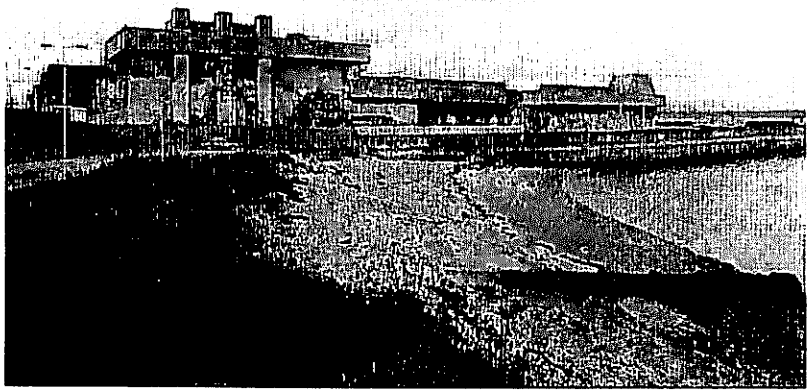


ブレスト潜水隊司令ヴィンター少佐と内野艦長（大佐）

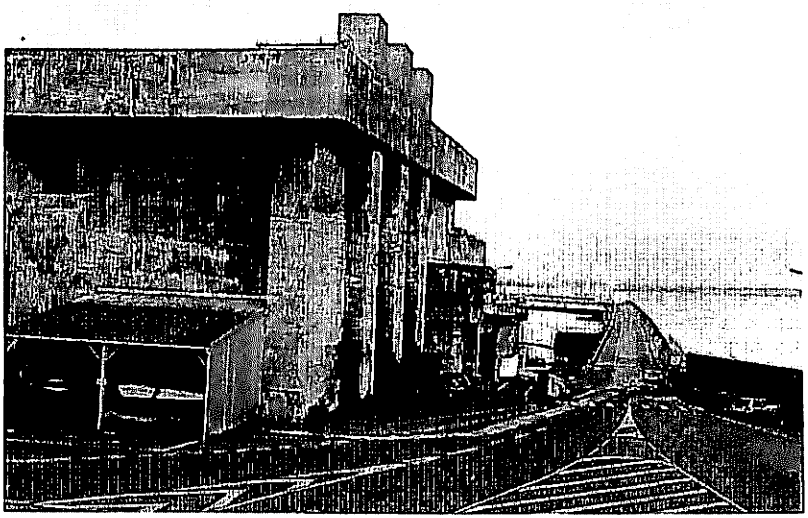
ブレスト港のブンカーに入るところの伊８潜、艦橋の右端が内野艦長



ブンカー内においてドイツ海軍西部海軍長官テオドール・クランケ大将と握手する内野艦長

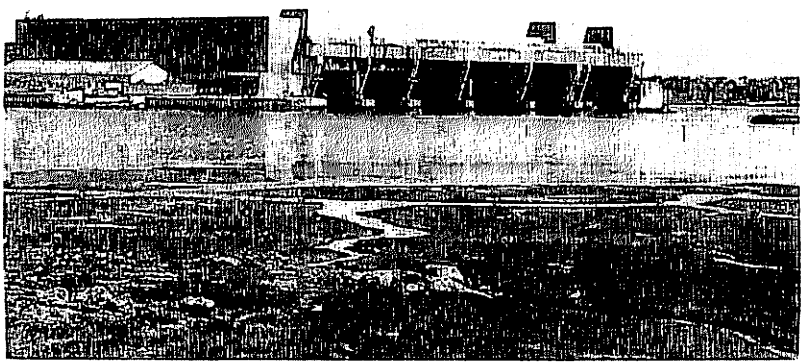


ブレストの独潜水艦用のブンカー（伊８潜が入った所）　　（筆者撮影）



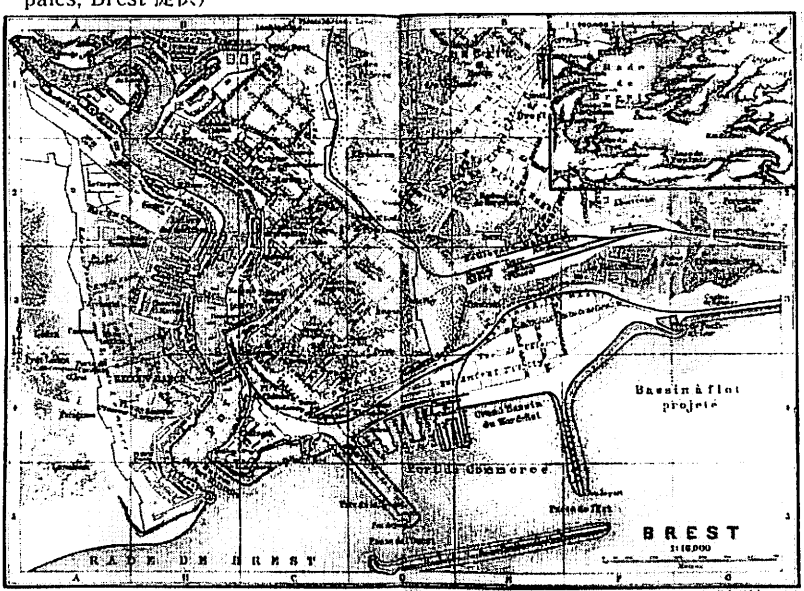
ブンカーの裏手　　（筆者撮影）

ブレストの城（シャトー）より見たブレストの港口　　（筆者撮影）

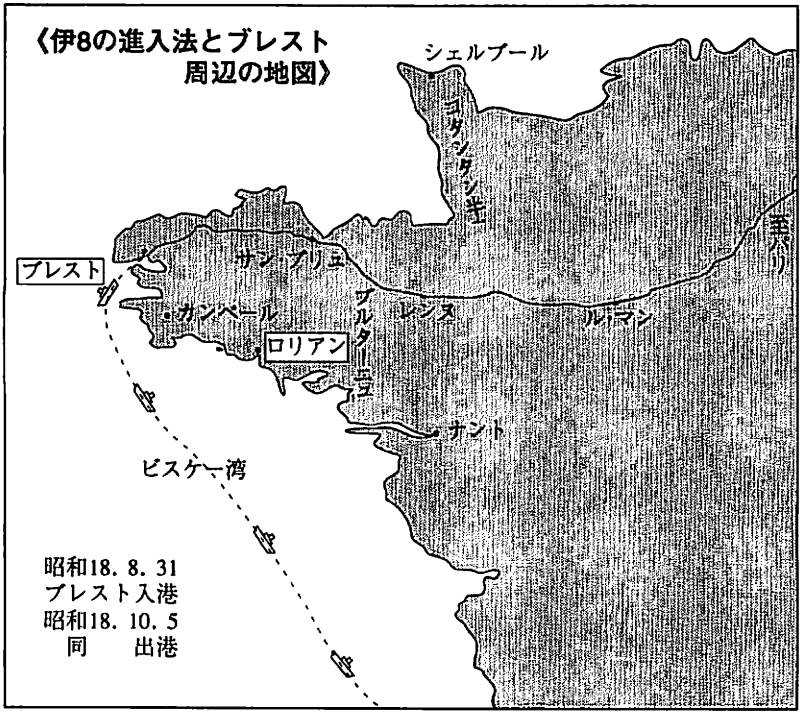


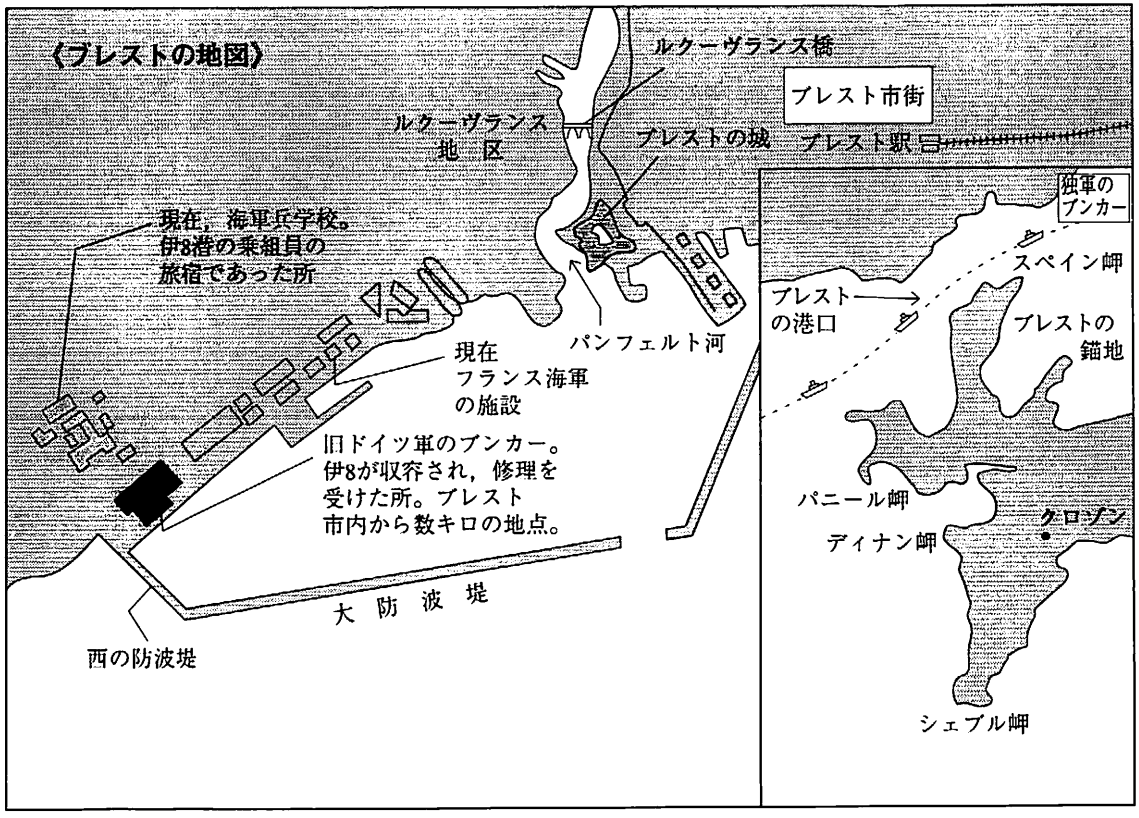
ロリアンのブンカー（現在はフランス海軍が使用している）　　（筆者撮影）

伊８潜の乗組員たちが休養をとったシャトーヌフの全景（Archive Municipales, Brest 提供）



ブレスト市街と港湾地区の図


《伊8の進入法とブレスト
周辺の地図》
シェルブール
コタンタン半島
ブレスト
サン・ブリュ
カンペール
ロリアン
ヴルターニュ
レンス
ルアン
ナント
ビスケー湾
昭和18. 8. 31
ブレスト入港
昭和18. 10. 5
同　出港


《ブレストの地図》
ルクーヴランス橋
ブレスト市街
ルクーヴランス地区
ブレストの城
ブレスト駅
現在，海軍兵学校。伊8潜の乗組員の旅宿であった所
パンフェルト河
現在フランス海軍の施設
旧ドイツ軍のブンカー。伊8が収容され，修理を受けた所。ブレスト市内から数キロの地点。
大防波堤
西の防波堤
独軍のブンカー
スペイン岬
ブレストの港口
ブレストの錨地
パニール岬
ディナン岬
クロゾン
シェブル岬